

## ♪朝の新宿 小田急エース

西川 伸一

♪夜の新宿 裏通り」といえば、八代亜紀の大ヒット曲「なみだ恋」(一九七三年)の歌いはじめの歌詞である。

さて、今年度も月曜一限の授業を入れた。学生にとってはいい迷惑だろう。だが、フィギュアスケートの選手が難度の高いジャンプを最初にもってくるように、いちばんプレッシャーのかかる講義科目は週の最初にこなしたいのだ。

そこで悩みの種は通勤ラッシュである。一限のはじまる九時より少し前に大学に着く電車に乗ると、車内はすし詰め状態でなにもできない。まったくの時間のムダであるし、映画『それでもボクはやってない』的な状況にいつ陥らないとも限らない。各停を選べば、座れないものななんとか新聞くらいは読めるのだが、通過待ちばかりで時間が相当余計にかかる。

いっそのこと家で朝食は取らずに、早い電車に乗って座っていいこうと思いついた。

自宅のある京王線の最寄り駅を六時台前半に出る電車なら席を確保できるのではないか。そこで何週間か「実証研究」してみたところ、座れる確率は一〇〇%ではなかった。しかし、五時五五分発であれば二つ手前の駅が発発ということもあって、絶対に座れるのである。今年度後期からはこの各停を「愛用」している。

必ず座れるとわかっていると、心に余裕が生まれる。朝刊をゆっくり読もう、きょうの授業の確認をしようなどと、はりきって家を出る。なのに車内で睡魔に負けてしまうことがままあり、なんともだらしがない。

一方で、早朝の通勤ですごい人もいる。私の尊敬する渡部昇一先生がこう書いている。

「S氏は、中央線で一時間半ばかりかかるところに住んでいるが、彼は毎日、必ず始発に乗って都心にある勤め先に行く。もちろん電車はガラガラである。彼はゆっくり腰をおろして専門書を読み始めるのだ。〔中略〕彼はいつか私に言ったことがある。『毎日、必ず始発電車に乗ることに私は一生の希望を托しているのです。そうで

もしなければ、みんなと同じ平凡なことになっちゃうからなア」と。「渡部昇一（一九七六）『知的生活の方法』講談社現代新書、一八四頁。

始発通勤に一生をかけるとは、私からすれば神の領域に属する行為だ。

ところで、私の早朝通勤の唯一の難点は、笹塚で乗り換える電車を七分も待つことだ。ただでさえ待ち時間の七分は長く感じられるが、吹きっさらしのホームだから寒くなってくるとつらい。そこで終点の新宿まで行って、そこで朝食を取ってから神保町に向かうことにした。車内で寝入ってしまい、笹塚到着に気づかず降り損ねたこともよくあったのだ。

新宿で朝食となると、京王線の改札を出てすぐの小田急エース南館が便利だ。例の各停は六時四〇分に新宿に着く。数分で小田急エースに入ると、すでにハンバーガーのファストフード店がオープンしている。だが、私はファストフード店の薄いコーヒーは飲みたくない。さらにいえば、店員さんのマニュアルどおりの言葉遣いがうるさい。そこでみつけたのが、「カフェ珈人」という喫茶店である。営業時間は七時からとなっているが、一五分も早く開けてくれる。なんともありがたい。

この秋以降は私が毎週月曜日が一番客か二番客である。だから、すっかり店員さんから顔を覚えられているようだ。黒縁めがねをかけたウエートレスさんがいつも「このオヤジ、また来た」とばかりにほほえんで、オーダーを取ってくれる。

私と同様にこの時間帯の常連客がいて、席も注文も決まっている。私の指定席の右斜め前の席には、私と先着を争うライバルのはげ上がったおじさんが、決まっておにぎりを頬張っている。ちなみに私はサンドウィッチとコーヒーを必ず取る。淹れ立てのコーヒーはうまい。最寄り駅のコンビニで買った東京新聞（たまに産経新聞も）をここで読みながら、一〇分少々で朝食を食べ終える。さあ会計だ。

「いってらっしゃいませ」毎回会計をしてくれるウエートレスさんの明るいう声とすてきな笑顔に背中を押されて店を出る。そして、左に折れて都営新宿線の乗り場に向かいながら、一曲歌いたくなる。♪朝の新宿 小田急エース。私の一週間がさわやかにスタートする。

二〇一三年一月二八日（月）